



来館子ども模様

児童厚生員の寄稿から

(社)全国児童館連合会事務局次長

依田 秀任

いろんな遊びで解放されたり、リラックスした雰囲気のある児童館には、良くも悪くも子どもの本来の姿をみることが出来る。米でも米なくても良いという義務感のなさや、成績・評価などの利害関係にないところが、子どもを素にするのかも知れない。「何やっっているかわからない」と言われることもある児童館だが、ここには子どもに寄り添い、喜怒哀楽を共感し、ときに叱咤激励する児童厚生員がいる。そして、頼りにしてくる子どもたちとの親密な営みがある。

というわけで、今回は児童館の最前線から、子どもたちの生の姿や出来事、子どもたちに思うことなど、自由に寄稿していただいた。紙面の都合で抜粋・簡略化することを詫びながら、全国の児童館で毎日おこっているヒューマンドキュメンタリーの一部をご紹介します。よろしくお願いいたします。

第一話 「気になるあの子」

「気になる子」で、顔が浮かぶあの子はい

るだろうか? 「気になる子」は、必ずしも「悪い子」とか「問題傾向がある子」ということだけではないはずだ。気になる言動の多くは、心理学や社会学など学問で解釈できることもかも知れないし、育成環境とか人間関係から体现される場合もあるだろう。それら背景への思慮なく、「今どきの子は:」と現象だけを捉えて嘆くことは不毛である。その子の言動の原因が理解できないとき、私たち大人(特に職業として関わる者)はしばしば不安になるのだろう。

■友達と上手に関係がとれない彼は、遊びに入れてもらえず邪魔ばかりしている。勝手に他の子の自転車に乗って行ってしまふ。やりたい放題に大人は振り回されて、鼻刺に注意してもアッカンペー。彼の居場所をつくらうとするも、遊びの邪魔をしてきたり仲間外れになっている。

(茨城県・行政担当職員さん)

■極端に甘えたり独占したがったりする子どもが少なくない。低学年では「ダッコして」「おんぶして」と、とにかくスリスリベタベタからみつく。高学年でも「対一の対応を求め、集団の輪の中になかなか入ろうとしないし、逆にそこから職員を突き放そうとする。(石川県・児童厚生員さん)

■指導者のそばを離れない子。何も言えずに黙っている子。返事もできずに首だけを振る子。自分の行動ひとつ一つを言いに来る子など様々。壁へ、プールへ、ピアノへと親にコントロールされて、時間を忘れて遊ぶことや、冒険遊びなどができなくなっている。(兵庫県・児童厚生員さん)

今でこそ大人になった私たちが、子どもの頃はどうかだったのだろうか? 少し質は違っても、当時の「気になる子」だったのかも知れない。私などはきっとそうだったに

「気になる親」にはなりたくないものだ。



第2話 「愛されるわけ」

結構ワルサもするんだけど、なぜか「憎めないやつ」はいないだろうか？結局いつも人の輪の真ん中にいたり、どんなグループにも入れたり、天性的なコミュニケーション能力をもった子がいる。方で、それができない人間関係上のハンディキャップもいる。

恋愛にも共通することだろうが、愛されるにはそれなりの理由があるはずだ。たとえば「明るい」とか「おもしろい」とか「苦言を言わない」ことなどは、容姿以上のファクターかも知れないということである。「こんにちは」「さようなら」のあいさつとか、「ありがとう」「ごめんなさい」「ちそうさま」という社会

的言葉を口にできる子は好かれるし、できない子は好かれない。これは差別ぶ々のレベルではなく、根源的な人間心理なのだと思う。人をほめたり、認めたり、気持ちをくんだり、好感をもたれる言葉をいっばい備えることは、しつけとかマナーではなく、生涯にわたって愛される術なのだ。

■マルコムくんのような風貌の彼だが、常に彼女がいる。相手が変わることはよくあること。すっかりその気になった女の子に、靴を履かせてもらったり甲斐甲斐しく世話をされている。7オにして女心をくすぐるツボを心得ているようで、髪型が変われば「かわいい、すごく似合うよ」と言かけを欠かさない。

（福岡県・児童厚生員Yさん）

児童厚生員だって感情ある人間だから、「あの子はどうも合わない」と思うことがあって至極ノーマルだと思う。子どもに対する愛憎の感情がタブーなのではなく、プロがそれを悟らせてしまうことがタブーなのだ。

第3話 「強く影響する存在」

少し前に終わったが、TBSのドラマ「ビューティフルライフ」はご覧だったろうか？車椅子に乗った杏子（常盤貴子）と美容師の柊（木村拓也）の恋愛物語である。その中

で、杏子がバリアフリーについて説明すると、柊が「じゃ俺があんたのバリアフリーになつてやるよ」と言うシーンがあった。「常盤貴子が相手なら、誰だってそうするぜ」とつつこみながらも、二人が何の障害もないカップル以上にお互いを高めあつていく話に感動した。障害のある人を一般化する乱暴な表現と思われたくないが、時として障害のある人がまわりの人の生き方に強く影響することがあるのではなからうか。たとえば「五体不満足」の著者乙武洋匡さんのように。

■中学生のキャンプでのこと。キャンドルファイヤーの種火は、幻想的な世界をつくりだしていた。全員のA君には、その場を「コーディネーター」が話して聞かせた。「どうでもよかった」と答えた彼の心の瞳には、私たちが同じものが写っていた。

（宮城県・指導員Zさん）

■障害は幼い頃の色々な経緯や身体の変化を導いたが、彼は元気に過ごしていた。ホルトリが得意で歌も上手な子だった。時々ワルトマンにもなった。ベンチに座り静かなひとときを過ごすのが習慣になっていた。彼の校庭の小さな構えも、その友達は今でも彼の家を訪れている。

（長崎県・児童厚生員Mさん）

障害のある児童に開かれている児童館は全国で35・1%となっている。(注：平成8年度全国児童館実態調査) いろんな障害があるわけだから、程度の問題だとか、職員数や施設の建てられ方など、解決すべき環境的課題があることは無視できない現実だ。しかし、児童福祉法では年齢の定義をしているが、障害の有無での制限に法的根拠はない。児童館の対象は、障害があろうがなかろうが「児童」である。児童館に対するニーズは療育することではなく、彼らはただそこに居たいだけなのだと思う。遊びや生活の中に普通に彼らが居ることが、福祉教育でありノーマライゼーションということなのだろう。粗暴な子が障害のある子との関わりから優しくなれたという話に代表されるように、その出会いをきっかけに人が劇的に変わっていくことは決してめずらしいことではない。

第4話 「悲嘆を癒す」

欧米の児童施設の中で「サンダールーム」という部屋があるらしい。その部屋では、サンドバックを力一杯殴ったり、思いっきりボールを投げつけたり、大声で泣いたり叫んだりして、子どもたちの怒りや憎しみ、悲しみといったフラストレーションを緩和させるのだ。また、悲しみを克服するための援助プログラムもある。日本では「物にあたるな!」などと言われて、あまり良くない振る舞いと

される。「泣くんじゃない!」ともよく言われたものだ。私も子どもの頃、母親に「男が泣いていいのは親が死んだときだけだ」と叱られ、「はやく泣きたいわ」と悪態ついたことを覚えている。「あたらない」「泣かない」美德は今も健在だ。

子どもにとって最大のストレスは肉親の死であり、特に親の死は想像を絶するストレスだと言う。人生悲喜こももと言うが、悲しみばかり背負わされる子どもが目の前にいたとしたら、私たちに何ができるのだろうか?

■小さい頃からよく遊びに来ていた中一のAは、特に同僚の児童厚生員とのおしゃべりを楽しみにしていた。私にもお母さんの話をしたことがあった。ある日、彼女のお母さんが急死した。どんな言葉で慰めればいいのか、言葉を探す私たちに児童館に来た彼女は「今度からお兄ちゃんのお弁当も作ってあげなくちゃ!」と明るく応えた。悲しさを押し隠したその笑顔がどこもつらかった。

その後同僚に家族のことなどたくさん話すようになった。半年未りが過ぎた頃、今度は兄の訃報。新聞で「交通事故」「即死」と知り、言葉にならない怒りと悲しみで絶句する。彼女は大好きな兄の話をよくしていたし、兄の存在が母の死を力押ししていたようにも思った。彼女の痛みがわかりすぎる同僚は、その日真実のまま仕事を終えた。



悲しみと困惑の中、彼女を待った。三週間ほどして彼女はまた同僚を訪ねた。葬式のこと、お父さんのこと、少しずつ話していったよだった。彼女は決して涙を見せず気丈に振る舞った。彼女は児童館に遊びを求めてはいなかった。ただ児童厚生員と話をするだけよかった。もはや同僚は彼女にとってかけがえのない存在だった。

(橋本原 児童厚生員Bさん)

ひとりの少女に寄り添って、その悲しみを分かち、心の支えになった児童館と児童厚生員に敬意を表したい。